

滋賀県レイカディア大学 同窓会  
**甲賀・湖南支部だより** 第30号

滋賀県レイカディア大学  
同窓会 甲賀・湖南支部  
発行責任者 浦田 好造

目次

支部長挨拶 新年を迎えて	(34期 園芸 浦田 好造)・・・	P 2
秋のグラウンドゴルフ大会	(38期 園芸 吉治 孝和)・・・	P 3
ボランティア活動(子供の森)	(33期 園芸 竹内 重行)・・・	P 4
子供食堂「てるてるぼうず」の草刈り	(36期 園芸 本田 秀信)・・・	P 5
同好会活動(グラウンドゴルフ同好会)	(33期 園芸 田村 光男)・・・	P 6
同好会活動(里山ハイキング同好会10月)	(31期 地文 高山 雅史)・・・	P 7
同好会活動(里山ハイキング同好会11月)	(31期 地文 高山 雅史)・・・	P 8
小林さんを偲んで	(33期 陶芸 林 弘實)・・・	P 9
編集後記	(31期 地文 高山 雅史)・・・	P 10



令和3年 正月 土山・田村神社の大絵馬

## 新年を迎えて

支部長 34期 園芸 浦田 好造

新年おめでとうございます。

昨年は新型コロナウイルスに振り回され、本会におきましても、ほとんどの行事が中止に追い込まれました。

その中でも、三密をできるだけ避けた「理事会」を開催し、議論の末、屋外実施のグラウンドゴルフ大会やボランティア活動等は実施することができ、他支部と同様に、わずかながらも、同窓会員の交流を続けることができました。

年が改まり、元に戻ることを期待していましたが、ご承知のように、新型コロナウイルスは益々猛威を振りまいており、高齢者主体の私達会員にとっては、早期回復は期待薄の現状です。ワクチン接種、治療薬の開発によるコロナウイルスの抑え込みに期待しています。

ところで、太平洋戦争でのミッドウェー島、ガダルカナル島での敗戦の要因として、トップレベルでの現状の的確な把握不足と希望的観測という「失敗の本質」がありましたが、それが今回のコロナ対策においても「写し絵」のように現れています。残念ながら、日本人の考え方の本質は変わっていないのでしょうか。

このような状況にあって、日本人はすばらしいなあと思わせられる快挙が昨年12月にありました。すなわち、12月6日に予定通り帰還した「はやぶさ2」です。前回の「はやぶさ」が、絶望的とも思われた状況から、関係者の必至の努力と先を見越した設計により、「サンプルリターン」という、初期の目的以上を達成したことには感動しましたが、今回はトラブルもなく予定通りの計画を達成しました。それも、約600人からなるプロジェクトが、一丸となって難関を乗り越えた結果で、その様子が先日テレビで放映され、「小惑星探査にかけては世界一」という自慢話も納得できました。

戦後、「ゼロ戦」を生んだ日本の航空技術に脅威を感じた戦勝国から、航空宇宙技術の研究をストップされていましたが、それが解禁された後の1955年に「ペンシルロケット」という、おもちゃのようなロケットからスタートし、大型ロケット、宇宙ステーション、宇宙探査機と他国より予算も限られた中での成功話に、明るい未来を感じています。

話し代わって、私達レイ大同窓生の現状をみますと、年齢を感じさせない活躍をしている方々を身近に拝見しています。ともすれば、年齢と共に体力・気力の衰えを実感せざるを得ませんが、この方々は生き方の指標になると思います。

又、巷でも、新型コロナウイルス対応策を練っている中で、新たな生活様式の提案がなされ、従来の生活様式にとらわれることなく、新たな生き方が模索されています。

具体的には、リモートワーク、ワーケーションの推進とそれに伴う生活様式の変化です。私達も、コロナショックを契機として、従来の延長ではなく、新しい生き方を模索していき、うまくいった例を公開し共有していきましょう。



## 秋のグラウンドゴルフ大会

体育部 38期 園芸 吉治 孝和

開催日：令和2年9月29日（火） 場所：水口町 野洲川グラウンドゴルフ場  
参加者：5班・25名 進行：PM1時15分集合・・・記念撮影・・・支部長挨拶  
PM1時30分スタート・・・16ホール終了後お茶休憩・・・2ラウンド

今回は新型コロナウイルス感染予防の為マスク着用での大会となり通常とは違い、若干やり難い面もあったかと思いますが、絶好の秋晴れの元、沢山の会員様にご参加いただき楽しく半日を過ごすことができありがとうございました。

今回入賞されました方おめでとうございます。また残念ながらあと少しで入賞に届かなかった方、次の大会では、是非頑張ってください！！  
改めて皆様の協力のおかげで前半の体育行事を無事終了することができました。  
お礼申し上げます。



優勝：畑中さん



準優勝：竹内さん



三位：市井さん

## ボランティア活動 「水口・子どもの森」の整備活動

ボランティア活動部 33期 園芸 竹内重行

12月4日穏やかで暖かい日差しの好天の日に、里山である「みなくち子どもの森」において理事12名でボランティア活動を行いました。会員の皆様に参加をお願いするつもりでしたが、あいにくのコロナの感染拡大で多くの集まりは無理と判断し、理事だけのボランティア活動となりました。

さて、今年は2年後に開催される植樹祭に何かお役に立ちたい趣旨で同森に相談し活動の運びとなりました。

活動は4班にわかれ、1班は駐車場の車止めのペンキ塗り、入り口周辺の落ち葉拾い、2・3班は散策路（メイン通路）の樹名板や立て看板の清掃と取り換え、4班は尾根道のごみの収集等を約1時間半かけて実施しました。

広大な「子どもの森」でしたが駐車場とメイン道路の整備はできました。



作業後は同園にある自然館を見学し、昼食を隣接するサントピアホテルでとりました。久しぶりの会合で参加者の元気でエネルギー溢れる会話で盛り上がり解散となりました。

次年度も同森で引き続き実施したいという思いです。

最後になりますが、理事で大先輩である小林和雄氏が参加予定でしたが、数日前にお亡くなりになりました。哀悼の意をあらわし食事前に黙祷を捧げました。



## ボランティア活動 子供食堂「てるてるぼうず」の草刈り活動

36期 園芸 本田 秀信

滋賀県社会福祉協議会より 甲賀・湖南支部 同窓会へ子供食堂「てるてるぼうず」の開催場所の草刈りの依頼が本年の初めにありました。同窓会理事会で協議した結果、有志にて対応することになりました。

場所が土山町のため、土山町の堀理事にリーダーをお願いし、有志4名（浦田、竹内、大平、本田）計5名で草刈りを実施することにいたしました。

子供食堂の建屋は、開催者の佐伯さんの実家（土山町北土山）を利用し、年5～6回開催されているようです。

その家は、空き家の為、草が生え放題となっています。

草刈りは、年2回の約束で実施することにしました。1回目は本年5月26日に実施し、2回目は11月17日実施いたしました。草刈り機3台使用し軽トラック2台分の草を刈りスッキリいたしました。



## グラウンドゴルフ同好会

33期 園芸 田村 光男

## 令和2年度 同好会活動報告

同好会では年6回の大会と成績発表大会を年間活動として計画しておりました。

新型コロナウイルス禍が新年度に入ると爆発的拡大傾向になり、県及び市から感染防止対策として、三密防止の徹底と公共施設（体育館、運動場、図書館等）が閉鎖となりました。

本年度の第一回大会を4月17日に開催予定で、会員の皆様方にハガキ等で連絡しておりましたが、至極残念ながら開催を断念いたしました。

7月初旬には新型コロナウイルス禍が減少する傾向になり、公共施設も解放されることになりました。グラウンド場でのプレー中もマスクの着用と、密集と密接を避けることを条件に使用可となり、早々に第一回の大会を7月17日に計画致しました。ところが当日は朝から雨模様天気のため中止。一週間後の7月24日にやっとの思いで開催、久しぶりのプレーを楽しんで頂く事が出来ました。

その後、第2回、第3回、第4回の大会を天候に恵まれなかったなかで、各大会を終えました。続いて第5回、第6回大会と成績発表大会を計画しておりました。

ところが新型コロナウイルス禍が再度拡大する状況になり、不要・不急の外出自粛の要請と会員の皆様方の健康面から令和2年度の残りの活動計画は取り止めとし、今年度の活動は終了致しました。

## 今年度の成績

## 第1回～第4回

(敬称略)

- 1位：鈴木 勲
- 2位：市井 眞一
- 3位：田村 光男
- 4位：木田 勝彦
- 5位：木村 栄子



## 里山ハイキング同好会

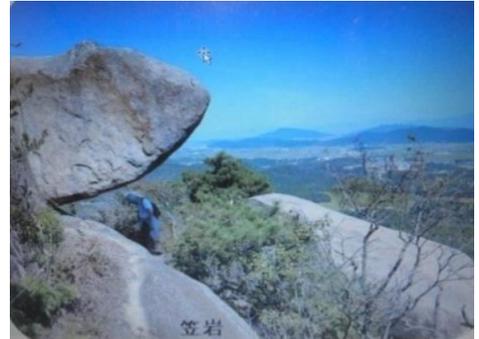
## 31期 地文 高山 雅史

## \* 10月15日 十二坊（岩根山）トレイルランコースハイキング

林道ゲート（榎橋）をスタート（9：40）し正福寺へ向かって歩く。竹林を抜けて山道をに入り八大龍王社（雨乞い）へ向かう。雑木林の道なので以外と涼しい。途中3回ほど休憩を入れて1時間ほどで林道に出る。

林道沿いの最初の鉄塔の前の小ピークに八大龍王社の祠がありこの参道を登ってきたことになる。林道を行くと第2の鉄塔があり前に東屋があった。

ここより10分ほどで笠岩、立岩の入口に着く。急登の入口から少し下り5分ほどで立岩に着きこの先に笠岩があった。快晴の下傘型の巨岩の先に湖南市の工業団地から近江八幡まで抜群の展望であった。



再び林道に戻り40分ほどで十二坊（岩根山 405m）頂上に着く。今回はトレイルラン（湖南市）22kmの内8kmのアップダウンの少ないコースを逆回りで笠岩などに寄り道して歩いた。

砂山の頂上は展望も素晴らしく、南の湖南市の阿星山から飯道山、東方に綿向山など鈴鹿山系、さらに北の伊吹山まで見飽きることがなかった。

ここで昼食後南に開けた尾根道をシャクナゲの道の入口から杉林をひたすら下り、岩に囲まれた水の流れる狭い谷筋を飛び石伝いに行く。

着いたところが6世紀後半に造られた岩瀬谷古墳であった。横穴式の石室古墳がまだ3基残っている。

また鎌倉時代の石切り場でもあり石を割る前の加工途中の矢穴石も残っていた。

さらに谷筋を下り巨大な鉄パイプで組まれた堰を超え車道を下って下山口の岩瀬神社の鳥居前に無事到着（14：40）。滑りやすい所もあるランコースだけあってかなり厳しかったが冒険心も満足させてくれた楽しい一日でした。



## \* 11月11日 石清水八幡宮と木津川流れ橋散策

今年はコロナで春のハイキングが出来なかったので秋の2回のみになりました。

今回は「石清水八幡宮と木津川流れ橋散策」です。

京阪石清水八幡宮駅をスタートしてまず神応寺の境内を通り「こもれびの道」の標識に沿って「鳩ヶ峰」を目指します。林の中の一方の結構急な山道登ります。タケノコの産地だけあって途中よく整備された竹林（タケノコ畑）を見て、再び山道を行くと、50分ほどで八幡市最高点と書かれている「鳩ヶ峰（142.5m）」に着きました。雑木林の中で展望はありません。

頂上から30分ほど下りエジソン記念碑を通り両側に石灯籠の並んだ表参道に出ました。正面の南総門をくぐり豪華な石清水八幡宮社殿に参拝しました。この八幡宮は日本三大八幡宮の一つで日本最古、国宝に指定されています。さらに横の東総門より展望台に向かいここで昼食です。

眼下には木津川、宇治川、桂川の三川が望まれ北の方向の天王山の下で合流しています。朝から晴れたり曇ったりの天気は快晴となり展望は見応えがありました。

昼食後下りの裏参道が崖崩れで通れない為表参道を下ります。石段の途中の石清水社に寄りました。ここで湧き出た「石清水」は冬に凍らず夏に涸れない「石清水八幡宮社」の名の由来となったところです。

さらに石段を下り二ノ鳥居をくぐり横に掛かる木の太鼓橋である「安居橋」（あんごばし）を見て頓宮を通り一ノ鳥居から京阪八幡駅に戻りました。

駅前のバスで「上津屋流れ橋」に行きました。バス停から5分ほどで木津川の堤防に出ました。広い川の両側はきれいな茶畑で、左岸の土手は芝がきれいに刈りこまれていました。

土手からは幅の広い木津川に灰色の木橋がくっきり見え、欄干が無い「日本の原風景を思わせる木造の風情ある姿」と言われるように幅広い淡い茶色の砂地の川に掛かる橋は見る人の気持ちをさわやかにさせてくれました。いつまでも見てい

たくなる景観です。流れ橋（上津屋橋）（こうづやばし）と言うのは大雨で水かさが増え水位が橋桁に達すると橋桁と橋板が浮き上がりますが、橋桁、橋板共にワイヤーロープで橋脚に固定されており流されず、水位が下がれば元に復旧する構造です。

365.5mの長い木造の橋を往復したのですが、橋の両側は何もないので川風に吹かれて渡る気分は爽快で豪華な石清水八幡宮社殿と木津川流れ橋ハイキングは、思い出に残る一日となりました。



## 小林さんを偲んで

33期 陶芸 林 弘實

私達の大先輩の小林さんを偲んで思いを述べさせていただきます。

レイカディア大学同窓会の甲賀・湖南支部の支部長を務め、その後は理事として新入会員の歓迎会、会員の作品展示会などにリーダーシップをとっていただきました。

また石部・甲西地区のまとめ役として私達の面倒をみていただきました。得意の陶芸では、甲西陶芸教室の第一人者として4つの班の取りまとめをされていました。教室の年度計画から各種イベントの計画を立案し、段取りなどでは外部の関係者との交渉まで全てをやっていただき、さらに近年は湖南省・社協班の窯焚きを一手に引き受けてもらっていました。その為か最近はずっくり陶芸をする時間がとれなくて、小物が多くなっていったようにみえました。得意の小魚形状の箸置きを作って出店では販売時に付録としてお客さんに喜んでもらっていました。

まだまだ教えて欲しい事は沢山あったのですがとても残念です。

これからは、後を継いでレイカディア大学同窓会の活動、及び陶芸部の活動を皆で力を合わせてやっていきます。

見守っていてください。



箸置き用  
小魚



在りし日の小林さん(左):みちくさコンパスで陶器を販売



## 編集後記

昨年3月頃より始まったコロナ禍で季節の変化を楽しむ余裕もなく、あっという間に時間が過ぎて行った感じです。この終息に期待のワクチン接種が何時行きわたるのか判りません。

コロナ禍のやり方として、以前から発表されていたリモートワークが進められています。遠隔でディスプレイの画面を通して主に事務系の仕事を進めるのですが、製品作りのメーカーなどの現場の仕事は将来的にはロボットの応用が考えられますが現状大変です。

もともとリモートワークの必要性は以前から言われていたのですが、このコロナが人々の生活全般にわたって大変革を迫ることになるとは誰も予測出来ていなかったと思われまます。

アナログのデジタルへの切り替えはある程度できますが、人と人の顔を会わすの長所をどの程度代えられるのか試行錯誤の状態です。

今当支部の会員平均年齢は78歳です。このわれわれにデジタル化と言われてもどのように進んで行くのかよく判りません。

いま進めてもらっているボランティア活動もほとんど人とのコミュニケーションで成り立っています。リモートワークの後戻りが出来ないとすればどのようにしていくべきか成り行きを見ている現状と思います。

支部も一部のボランティア活動と同好会活動以外諸行事が全てストップしています。一刻も早いコロナ終息を期待し、人々のコミュニケーションの復活を願っています。

(広報部 31期 地文 高山 雅史)

